

『三四郎』 ハイドリオタフヒア

Junko Higasa 2014.5.6

三四郎が広田先生から借りた「ハイドリオタフヒア」という本は、医学者・神学者であったサー・トーマス・ブラウン著「ハイドリオタフィア」で、原題『Hydriotaphia, Urn Burial 《水瓶埋葬、(古代ローマ・希臘の) 骨壺埋葬》』である。

何故か漱石はこの『三四郎』でラテン語 - 希臘語の重なりをよく用いる。「ダーターファブラ」というラテン語を与次郎に「希臘語だ」と云わせた如く、ここでもラテン語＋英語なのに「希臘語らしいね」と広田先生に云わせる。「希臘語」＝「与次郎の主張も、広田先生の生き方も、恋する三四郎には通じない」の含蓄だろうか。因みに希臘語の似た音を探すと「埋葬 ταφή (タフィ)」という言葉が見つかる。

さて、漱石が訳して作中に記した「ハイドリオタフィア」の末節であるが、『朽ちざる墓に眠り、伝わる事に生き、知らるる名に残り...』という後世に残りたいという願望は、エジプト、ローマのミイラ石棺埋葬である。生きるとは形で半永久的に残ることではなく、「常住の吾身を觀じ悦ぶ」ことではないか。三四郎はその自然な生き方を広田先生に認める。しかし三四郎の若さは『この一節が齎^{もたら}す意味よりも、その意味の上に這いかかる情緒の影を嬉しがった』その時の「真の自分」は、与次郎の日本的人物推奨も聞こえず、広田先生が示す自然な生き方も見えず、西洋的な美禰子との不自然な恋の永続を願っていた。